WILL BE V-ing 構文の多義性について

林　高宣*

Takanori HAYASHI

On the WILL BE V-ing Construction

要　旨

澤田（2014）と一條（2022）はWILL BE V-ing 構文に「未来における進行中の状況」「ことの成り行きの未来」「現在における進行中の状況に関する推量」といった３タイプの多義性を認めている。澤田は「現在における進行中の状況に関する推量」の助動詞willだけが認識的法助動詞であると述べ、「未来における進行中の状況」「ことの成り行きの未来」において助動詞willは（単純）未来の助動詞であるとしている。これに対し、本稿では「未来における進行中の状況」もモダリティを反映していること、さらに「ことの成り行きの未来」において助動詞willは命題内容化されていることを主張する。

また、一條はWILL BE V-ing 構文の「ことの成り行きの未来」用法と「意志を表すWILL BE V-ing 構文」とを対比させ、「ことの成り行きの未来」用法が話し手の意志を表さないのに対し、「意志を表すWILL BE V-ing 構文」が話し手の意志を表すと述べている。しかし、この用法は「話し手による現在時での予測判断」を表しており、文脈に依存して「現在における進行中の状況に関する推量」用法と「未来における進行中の状況」用法に「意志」とされる解釈が与えられることを述べる。

【キーワード：WILL BE V-ing 構文、話し手による現在時での予測判断】

１．はじめに

澤田（2014）はWILL BE V-ing 構文に多義性を認めている。

（１）I *will be flying* to London at 5 p.m.
（Declerck 1991:167）

（１）は「自分は午後５時にはロンドン行きの飛行機に乗っているだろう」という解釈と「午後５時に自分はロンドン行きの飛行機に乗ることになっている」という２つの解釈が可能である。[1]（２）は前者と同様の解釈である。

（２）This time next week they *will be sailing* across the North Sea.　（Leech 2004[3]:66）

澤田（2014:362）によれば、（１）の前者の解釈における午後５時は「基準時（reference time）」である。[2] 一條（2022:51）は、この解釈を「未来における進行中の状況」と呼んでいる。

一方、（１）の後者の解釈では「午後５時」は「事象時（event time）」である（澤田 2014:62）。澤田は、これを「ことの成り行き」、一條は「ことの成り行きの未来」と呼んでいる。本稿では一條に従って前者を「未来における進行中の状況」、後者を「ことの成り行きの未来」と呼ぶこととしたい。（３）も「ことの成り行きの未来」の例である。

（３）a. *Will* you *be putting on* another play soon?　（Leech 2004[3]:67）

b. Goodbye. *Will* you *be coming* back to England next year?
（Declerck 1991:166）

（３b）は素直に相手の予定を尋ねた表現となっているとDeclerckは述べている。

最後にWILL BE V-ing 構文には「現在における進行中の状況に関する推量」用法がある。

（４）By now they'*ll* be eating dinner［looking at one's watch］.　（Leech 2004[3]:86）

Leechによれば、（４）は未来ではなく、「現在についての予測（forecast about the present）」となっている。

２．WILL BE V-ing 構文の特徴

以上の観察からWILL BE V-ing 構文には主に３用法が存在すると判断されるかもしれない。但し、見方を変えれば「未来における進行中の状況」用法と「現在における進行中の状況に関する推量」用法は同じ範疇の文法現象を表していると考えることもできる。以下ではそれぞれの用法の特徴について澤田の分析をもとに見ていく。

2.1.「未来における進行中の状況」

澤田によれば、「未来における進行中の状況」では基準時を表す副詞句は文頭にあることが可能であり、かつ副詞stillを挿入して事象が継続中であることを示す。

* 島根大学教育学部英語科教育専攻

（5）At seven o'clock I'll *still* be watching TV.
（澤田 2014:363）

さらに、澤田は「未来における進行中の状況」における助動詞willは「（単純）未来」であり、話し手の推量を表しているのではないと述べ、この用法の特徴を（6）のようにまとめている。

（6）a．willは（単純）未来の助動詞であり、推量を表す認識的法助動詞ではない。
b．命題内容はある未来の基準時において進行している状況である。
c．基準時を示す特定的な時点副詞類が想定されなければならない。
d．副詞stillが挿入可能である。
（澤田 2014:363-364）

2.2.「ことの成り行きの未来」

澤田（2014:366）によれば、「ことの成り行きの未来」は本当に言いたいことの「前置き」として用いられることが多く、以下のように使用される。

（7）a．I'*ll be driving* into London next week, so I'll meet you in front of Big Ben on Tuesday.　（澤田 2014:365-366）
b．A: *Will* you *be seeing* him tomorrow?
B: Yes.
A: Well, in that case, could you tell him I got his letter?　（澤田 2014:366）
c．A: *Will* you *be using* your car tonight?
B: Why? Do you want to borrow it?
（Murphy 2000[2]:46）

以上から「ことの成り行きの未来」は次のようにまとめられる。

（8）a．willは（単純）未来の助動詞であり、推量を表す認識的法助動詞ではない。
b．助動詞willは主語の意志を表すことはない。
c．命題内容は、現在の状況がこのまま進行するとある未来の時点で自然に起こる状況を表す。
d．基準時を示す特定の時点副詞類は不要である。
e．副詞stillは挿入不可能である。
（澤田 2014:366）

2.3.「現在における進行中の状況に関する推量」

WILL BE V-ing 構文における「現在における進行中の状況に関する推量」用法は以下のようなものである。

（9）a．By now they'*ll* be eating dinner [looking at one's watch].(=（4））
（Leech 2004[3]:86）
b．Mother *will* still be waiting for us downstairs.　（澤田 2014:367）

澤田は「現在における進行中の状況に関する推量」用法の特徴を（10）のようにまとめている。

（10）a．willは（単純）未来の法助動詞ではなく、推量を表す認識的法助動詞である。
b．命題内容は現在進行している状況である。
c．基準時は現在である。
d．副詞stillが挿入可能である。
（澤田 2014:368）

この用法においては（10a）にあるようにwillは未来の助動詞ではなく、推量を表す認識的法助動詞であると澤田は述べ、その理由として文の意味をほとんど変化させることなく推量のwillが認識的mustに置き換わることをあげている。

（11）Our good host and hostess {*will* /*must*} be expecting us.　（Ibid.）

3．助動詞willのモダリティについて

Will BE V-ing 構文について「3種類のwillのうち、「現在における進行中の状況に関する推量」のwillだけが認識的法助動詞であり、他の二つのwillは単純未来のwillである」と澤田（2006:451）は述べている。ここでは助動詞willのモダリティ性について考えていく。

3.1. 助動詞willの用法

澤田は「現在における進行中の状況に関する推量」のwillだけが認識的法助動詞であると述べている。澤田は、この用法のwillを認識的法助動詞であると判断していると考えられるが、助動詞willに（単純）未来という働きを仮定する必要はないかもしれない。

Leech（2004[3]:86）によれば、助動詞willの「予測・予測可能性（prediction/predictability）」の用法は、助動詞mustの論理的必然性（logical necessity）と同様の文脈で使用され、実際に（9a）のwillをほとんど効果の違いなしにmustに置き換えることができる。（12）も「予測・予測可能性」の例であるが、これはある意味、現在の事象について述べる「現在における進行中の状況に関する推量」に相当する用法である。

（12）That'*ll* be the electrician－I'm expecting him to call about some rewiring [on hearing the doorbell ring].　（Leech 2004[3]:86）

助動詞willの「意志（intention）」の用法は主に一人称の主語とともに用いられ、約束・脅迫・申し出等を意味し、「中程度の意志（intermediate volition）」を表す。

（13）a．I'*ll* write tomorrow.
b．You *won't* get any help from us.
（Leech 2004[3]:87）

助動詞willの「意欲（willingness）」の用法は「弱い意志（weak volition）」を表し、強勢が与えられず、通常短縮形によって表示される。

（14）Jim'*ll* help you－he's always ready to oblige a friend.　（Ibid.）

最後に助動詞willの「主張（insistence）」の用法は常に強勢が置かれ、短縮形になることはなく、二人称・三人称が主語の場合、他者の頑なさに対する話し手の憔悴感が絶頂にあることを示し、一人称の主語とともにあっては妥協しない決心を表す。

（15）a. Janet, why 'will you keep making that awful noise?
b. I 'will go to the dance!（'you can't stop me!'）（Leech 2004[3]:88）

本稿ではLeech（2004[3]）に従って法助動詞willの用法を「予測・予測可能性」「意志」「意欲」「主張」と分類し、いずれの場合もモダリティを反映すると仮定する。

3.2. 「未来における進行中の状況」と「現在における進行中の状況に関する推量」

澤田（2014）はWILL BE V-ing 構文を 3 タイプに分類し、一條（2022）は澤田に従って、それぞれの用法を「未来における進行中の状況」「ことの成り行きの未来」「現在における進行中の状況に関する推量」と呼んでいる。澤田は「現在における進行中の状況に関する推量」の助動詞willだけが認識的法助動詞であると述べ、（5）（7）において助動詞willは（単純）未来の助動詞であるとしている。

しかし、助動詞willに（単純）未来の用法を仮定する必要はないかもしれない。澤田も一條もWILL BE V-ing 構文を 3 タイプに分類しているが、そのうちの「未来における進行中の状況」と「現在における進行中の状況に関する推量」はLeechの言う「予測・予測可能性」が未来の事象に適用されるか、現在の事象に適用されるかの違いに過ぎないからである。「予測」あるいは「予測判断」という発話時点における話し手の心的態度が現在の事象に適用される場合、「現在における進行中の状況に関する推量」用法であり、未来の事象に適用される場合、「未来における進行中の状況」用法となる。現在の事象にせよ、未来の事象にせよ、話し手にとって未確認であるという点では同様である。

また、「未来における進行中の状況」に関して澤田は（6 a）のように主張する根拠として、認識的mustは未来の状況に言及することができないからであると述べ、（16）を示している。

（16）a. It must be raining now.
b. It must have rained last night.
c. *It must rain soon.（澤田 2014:364）

実際に現在や過去の事象に対する推量に対して認識的mustを用いることは可能であり、（16c）のように未来の事象に対して認識的mustの使用は不可能である。

但し、（16c）を根拠に（6 a）を主張するには無理があるかもしれない。認識的mustによる推量は過去や現在の事象に対してなされるものであるが、「未来における進行中の状況」の助動詞willも発話時点における話し手の「予測」を表しているからである。澤田は（17）の例をあげて、事象と現在、すなわち発話時点との関係を強調している。

（17）Mary *must* be planning to go on a picnic.（澤田 2014:365）

話し手はメアリーがお弁当やお菓子を用意しているのを目撃した。すなわち、推量の根拠が現在にあると判断していると考えられる。しかし、その事実が助動詞willを（単純）未来の助動詞であると考えることを必ずしも支持することにはならない。

「現在における進行中の状況に関する推量」に関して助動詞willが推量を表す認識的法助動詞であると考えることは妥当であると思われるが、認識的mustに置き換わるか否かをもって、willが未来の助動詞、mustが推量を表す認識的法助動詞と区別することは適切ではない。本来、法助動詞willは発話時点における話し手の心的態度、すなわちモダリティを表しており、事象が現在のものであるか、未来に生じるかには関係なく話し手の現在の認識を示すものである。（16c）において助動詞mustが不可能である理由は、それが過去や現在の事象に対して適用されるという性質を持つためであり、（11）において助動詞willとmustが交換可能である理由は（11）が現在の事象に言及しているからである。

さらに、「ことの成り行きの未来」に関して澤田は認識的mustの命題内容が未来の状況に言及することはできないという制約に基づいて、この用法において助動詞willを認識的mustに置き換えることはできないと述べている。

（18）My secretary {*will*/**must*} be writing a letter to you, anyway（to confirm the purchase of those stocks）.（澤田 2014:367）

但し、ここでもwillが話し手の現在の推量を表す認識的法助動詞であることを否定する根拠となっていると考える十分な証拠とはなっていない。

3.3. 「ことの成り行きの未来」用法における助動詞willの働き

澤田（2014:370）によれば、状態動詞は進行形をとらないため、状態動詞がWILL BE V-ing 構文で用いられる場合には「ことの成り行きの未来」用法としか解釈できない。

（19）a. He *will be resembling* his father soon.
b. Apples *will be costing* a lot this fall.（澤田 2014:370）

ここで「ことの成り行きの未来」用法における助動詞willの働きについて考えてみよう。中右（1994）によるモダリティの概念的定義は「モダリティとは発話時点における話し手の心的態度のことをいう」というものである。[3] すなわち、モダリティは発話時と結びつくものでなければならず、発話時を離れては存在しえない。澤田は「WILL BE V-ing 構文」を分類するため次の原則を提示している。

（20）時点副詞類の原則：
「未来における進行状況」と「現在における進行状況に関する推量」のWill BE V-ing形においては、その状況はどの時点で進行中なのかを示す時点副詞（＝基準時）が想定されなければならない。（Ibid.）

そして、基準時を想定できない場合が「事の成り行き」であると判断され、「未来における進行状況」と「現在における進行状況に関する推量」の時間副詞類は「点」を、「ことの成り行き」のそれは「線」を示していると述べている（澤田 2014:369）。

つまり、「ことの成り行きの未来」用法のWILL BE V-ing構文における動詞句は「線」としての事象を表していることになり、発話時という「点」を表してはいない。ここから「ことの成り行きの未来」用法における助動詞willはモダリティを直接反映しているとは考えられない。本来はモダリティを表していた助動詞willが後続する進行形とともに頻繁に使用されることにより、命題内容化したと考えて良いのではないだろうか。すなわち、「ことの成り行きの未来」全体をさらに断定、あるいは提案するモダリティが上位に仮定されるのではないだろうか。これに関しては4.3節で後述する。

4．「意志を表すWILL BE V-ing構文」

澤田はWILL BE V-ing構文に法助動詞will以外の法助動詞が現れる例をあげている。ここではそのような「Modals BE V-ing構文」が、一條の言う「意志を表すWILL BE V-ing構文」の原型となっているという議論を展開し、「意志を表すWILL BE V-ing構文」の根源は「未来における進行中の状況」「現在における進行中の状況に関する推量」であることを主張する。

4.1. 「Modals BE V-ing構文」

澤田はWILL BE V-ing構文である（21d）（21e）も含めて「Modals BE V-ing構文」として（21a)-(21c）をあげている。

（21）a. I *may not be coming* this afternoon. （Leech 2004[3]:100）
b. I'd better be going soon. （Ibid.）
c. Dogs that are fed properly and walked in the evening *should* not be *making* messes in the house.（澤田 2014:372）
d. Well, the taste may be shocking the first time you try it, but once you learn to enjoy the taste, you *will* soon *be asking* for your food to be more and more spicy. （Ibid.）
e. What will happen when such computers are created? *Will* humans *be controlling* them or *will* they *be using* us as pets? What do you think? （澤田 2014:373）

（21a）は可能性を表し、「午後は来ないことになるかもしれない」と解釈され、（21b）も訪問先を去る客によって発話され、「まもなくお暇することがよい（と思います）」と解釈される。（21c）の「SHOULD BE V-ing構文」は「ちゃんと餌を与え、夕方散歩させている犬は家の中でそそうをしたりするようにはならないはずだ」、（21d）は「一旦トウガラシの味になれてしまうと、次第しだいにピリッとした食べ物の方が美味しいと感じるようになってくる」と解釈されると澤田は述べている。（21e）も「人間がコンピュータをコントロールすることになっているのか、コンピュータが人間をペットとして扱うことになっているのか」と解釈される。

（21a）は一條による「ことの成り行きの未来」用法である。（21b）は澤田（2014:369）が主張するように副詞soonが表れているため、「ことの成り行きの未来」と同様の働きをしているとみなすことができる。半助動詞（semi-auxiliary）had betterとともに現れているが、3.3.節で述べた助動詞willほどではないにせよ、半助動詞had betterはこの場合も後続の進行形とともに全体として命題内容を形成していると考えられる。（21c）は澤田（2014:372）が「この文のshouldは認識的なshouldであり、…」と述べているように「現在における進行中の状況に関する推量」であると判断される。「（21d）も副詞soonが表れており、「ことの成り行きの未来」と考えられる。（21e）はWILL BE V-ing構文であるが、最初の文によって発話の焦点が未来に設定されており、そこから後続するWILL BE V-ing構文が「ことの成り行き」であると澤田は述べている。

このように見てくると、「ことの成り行きの未来」用法における助動詞willが後続の進行形とともに命題内容化している場合を除き、「未来における進行中の状況」と「現在における進行中の状況に関する推量」の両方において「発話時点における話し手の心的態度」であるモダリティが反映されていると言える。それでは以下に「未来における進行中の状況」「現在における進行中の状況に関する推量」と一條が提唱する「意志を表すWILL BE V-ing構文」との関係について考えていく。

4.2. 「意志を表すWILL BE V-ing構文」

一條は澤田に従って、WILL BE V-ing構文の用法をそれぞれ「未来における進行中の状況」「ことの成り行きの未来」「現在における進行中の状況に関する推量」と呼んでいる。一條はWILL BE V-ing構文の「ことの成り行きの未来」用法と「意志を表すWILL BE V-ing構文」とを対比させ、「ことの成り行きの未来」用法が話し手の意志を表さないのに対し、「意志を表すWILL BE V-ing構文」が話し手の意志を表すと述べている。

まず、一條が主張する「意志を表すWILL BE V-ing構文」を見てみよう。一條はClose（1975:257）がWILL BE V-ing構文に意志の解釈を認める数少ない研究者であると述べ、Closeが（22）に「ことの成り行きの未来」と「意志を表すWILL BE V-ing構文」の両方を認めていることを指摘する。

(22) I'll be writing to you about that soon.
(Close 1975:257)

「意志を表すWILL BE V-ing 構文」としての（22）は「未来についての言及に対して現在の意志を加えている」と一條（2022:52）は述べている。また、次の（23）について一條はMonicaの発話を「私、黙るわ」と解釈している。

(23) ［Angela and Bob walk in. Bob is good-looking.］
ANGELA:Hey Joey.
MONICA:horribly … attractive, I'll be shutting up now.
（一條 2022:52）

JoeyとMonicaが一緒にいるところへAngelaとBobがやって来る。MonicaはJoeyに文句を言おうとしていたが、やって来たBobがあまりにハンサムであったので、文句を言うのをやめるという場面である。

但し、（22）が未来の事象に対して現在の意志を加えているということは、これを「未来における進行中の状況」用法とみなすことが可能なのではないだろうか。（１）の前者の解釈や（２）に仮定される「推量」と同様、未来の事象に対する話し手の現在の判断が適用されており、その判断を「意志」と解釈するか否かは文脈によって左右されると思われる。

また、（23）においても現在進行中の事象に対して話し手の判断が適用されており、これは「現在における進行中の状況に関する推量」に近い用法であると考えられる。実際、「推量」と「意志」は異なっているが、（23）は「今は黙ったままでいよう」と解釈され、現在進行中の事象にモダリティが加えられているという点では「現在における進行中の状況に関する推量」と同様の意味構造を形成していると言えるかもしれない。

さらに、一條（2022:53）は（24）をあげて、これも澤田による３タイプとは異なる用法であると述べている。

(24) Don't you worry 'bout a thing, mama
Cause I'll be standing on the side
When you check it out…
When you get off…your trip
(S.Wonder, *Don't You Worry 'bout a Thing*)

この例も「未来における進行中の状況」用法と同様の意味構造を形成している。一條自身が述べているように（24）のWILL BE V-ing 構文が表す事象は未来におけるものであり、その意味では（１）の前者の解釈や（２）に仮定される「推量」と同様、未来の事象に対する話し手の現在の判断が適用されている。そして、その解釈を「意志」とするか否かは文脈によって左右されると思われる。

4.3. WILL BE V-ing 構文の文脈依存性

「未来における進行中の状況」用法と「現在における進行中の状況に関する推量」用法とは別に「意志を表すWILL BE V-ing 構文」が存在すると一條は主張するが、この節では一見異なる用法であるかに見える現象が文脈に依存していることを主張していく。

「意志を表すWILL BE V-ing 構文」が存在することの根拠として一條は副詞definitelyとこの構文が共起する点を指摘している。

(25) a. I love this cake! ［…］Great recipe; I definitely will be making more!
(COCA)
b. The owner Paula could not have been nicer and made me feel very comfortable. I was very happy with the colors that she chose for my eyes ［…］. I definitely will be going back.
(COCA)

（25a）は「（とても気に入ったから）絶対このケーキをもっと作るわ」、（25b）は「（いいサービスをしてくれたから）絶対またあのお店に行くわ」のように「意志」を表すと述べている（一條 2022:54）。そして、副詞definitelyをWILL BE V-ing 構文に挿入可能な場合、それらの構文を「意志を表すWILL BE V-ing 構文」としている。

しかし、逆に言えば副詞definitelyがWILL BE V-ing 構文と共起していない場合には命題内容に対して「意志」というモダリティが示されているのか、「推量」というモダリティが示されているのか明確ではないことを意味している。

また、副詞definitely以外にも節I swearやI promiseが付加できることを示している。

(26) I promise/I swear from now on I will definitely be eating only healthy food.
（一條 2022:55）

しかし、これらの副詞や節は「意志」の用法が独立して存在することを支持しているとみなすより、これらの要素によってWILL BE V-ing 構文の解釈が「意志」の解釈へと傾斜させられていると考える方が妥当であろう。実際に（26）は主語がIであるため「意志」を表しているとも解釈できるが、「未来における進行中の状況」用法とも考えられる。

一條はWILL BE V-ing 構文が「意志」を表すことを支持するものとしてPalmer（1987[2]:138）の主張を引用している。Palmerによれば、助動詞willの「意志」と「未来」の意味を区別することは難しいが、強勢が置かれたり、否定文で用いられることにより固執や拒絶といった「意志」を表す。一條は（27）の例をあげ、助動詞willが否定文で用いられると同時に強勢が置かれることで「意志」を表していると述べている。

(27) a. I'm sorry, Daniel. I won't be calling you again. (COCA)
b. “I won't be crying anymore,” she tells me. (COCA)

そして、（27a）における副詞againや（27b）における副詞anymoreは肯定文における副詞definitelyに相当すると述べている。

但し、先ほど副詞definitelyがWILL BE V-ing構文と共起していない場合には命題内容に対して「意志」というモダリティが示されているのか、「未来における進行中の状況」用法なのか明確ではないと述べたが、実際に「意志」と「推量」を全く別のモダリティであると言い切ることは難しいと思われる。「意志」とは、上位範疇である「推量」の下位区分であると考えられるからである。つまり、両者が区別されると判断される根拠はここでも（27a）（27b）の発話状況、すなわち文脈であり、WILL BE V-ing構文が単独で「意志」を表しているとは判断されるべきではないかもしれない。

さらに、副詞節では未来の事象を表していても通常は現在時制が用いられるが、助動詞willが「意志」を表す場合には条件節内で用いることができると一條は述べ、「意志」を動詞intendや名詞intentionに書き換えた以下の例をあげている。

（28）a. Hope to see you all there! If you will be attending (=intend to attend), please let me know. （COCA）

b. If you will be carrying (=intend to carry) large objects such as surfboards or golf clubs, extra fees may be applicable. （COCA）

c. Refrigerate them if you won't be eating (=don't intend to eat) them right away. （COCA）

d. Even if they won't be supporting (= have no intention of supporting) us, we have no problem. （COCA）

一條（2022:56）は（28b）に対して「もし大きな荷物をお持ちになるつもりであれば」、（28c）に対して「すぐに食べるつもりがないのであれば」といった「意志」を表すと述べている。

林（2017）では，条件文の前件に現れる助動詞を客体化されたモダリティと考え，客体化されたモダリティと後件における話し手の判断との推論関係について述べるモダリティ型条件文という概念を提案した。これは事象と事象の因果関係について述べる事象型条件文と区別される。そして，本来主観的であるはずの認識的法性が客体化されている場合，客体化された認識的判断が助動詞willによって前件に表されることになる。柏野（2012:99）は，この認識的判断を「誰のいつの時点での予測判断か」という点から以下の3つに分類している。

（29）a. 聞き手による現在時での予測判断

b. 聞き手による未来時での予測判断

c. 話し手による未来時での予測判断

（29a）において「聞き手による現在時での予測判断」が可能になる理由はモダリティが客体化、すなわち命題内容化されているからである。（29b）において「聞き手による未来時での予測判断」が可能となる理由もモダリティが命題内容化されているからである。（29c）において「話し手による未来時での予測判断」が可能となる理由も同様である。この議論は直接WILL BE V-ing構文を対象としたものではないが、モダリティを表して「予測判断」という術語が用いられており、「予測判断」の下位区分として「意志」が存在すると考えられる。

（28a）は「聞き手による未来時での予測判断」を表している。（28b）も同様である。（28c）（28d）は「聞き手による現在時での予測判断」を表しているが、（28）の例はいずれも「予測判断」と解釈され、その下位区分として聞き手の「意志」が存在する。つまり、「意志」はWILL BE V-ing構文固有の意味特性と言うよりは文脈に依存して与えられていると考えるべきである。

以上の議論から（30）のように結論することができる。

（30）a. WILL BE V-ing構文における「ことの成り行きの未来」用法では、助動詞willが後続する進行形とともに命題内容化されている。

b.「未来における進行中の状況」と「現在における進行中の状況に関する推量」はLeech（2004[3]）の言う「予測・予測可能性」が未来の事象に適用されるか、現在の事象に適用されるかの違いに過ぎず、いずれの場合も「話し手による予測判断」を表している。

4.4.「話し手による予測判断」

一條は「意志を表すWILL BE V-ing構文」と「ことの成り行きの未来」を区別する根拠として（31）をあげている。

（31）a. I'll probably be greeting my boss tomorrow morning, but I definitely won't be talking with him for long.

b. *I'll probably be greeting my boss tomorrow morning but definitely not be talking with him for long.

（一條 2022:58）

（31a）は前半が「ことの成り行きの未来」用法であり、後半が一條の言う「意志を表すWILL BE V-ing構文」である。（31b）はI willを共有した等位接続であるが、これが許されないことから「意志を表すWILL BE V-ing構文」と「ことの成り行きの未来」は異なるものであると述べている。実際、（31b）は容認されないが、（31a）の後半部分に対して「意志を表すWILL BE V-ing構文」という独立した立場を想定する根拠とはなっていない。（31a）の後半部分は「話し手による現在時での予測判断」を表しているからである。

さらに、「ことの成り行きの未来」は日常的に予測されない出来事に対しては通常不可能である。

（32）a. ?*Margot will be poisoning her husband when he gets home.

（Leech 2004[3]:68）

b. ?I'll be poisoning my wife tonight.

（Declerck 1991:165）

但し、一條は主語が１人称である（32b）は「意志を表すWILL BE V-ing 構文」と解釈することも可能であると述べ、この用法が他の３タイプとは独立した用法であると結論づけている。しかし、この場合も「話し手による現在時での予測判断」を表していると考えられる。

さらに、一條（2022:59）は「意志を表すWILL BE V-ing 構文」がその場で思い立った「意志」を表すと述べている。

（33）a. “Well, if there is nothing else now I will be going to my room.”
“OK, nice talk Lucas.” I then went to my room. （COCA）

b. It's the New Year again and to me that associates with new resolutions, new decisions, new plans and of course new diet with the promise that from now on I will be eating healthily in the smaller amounts. （COCA）

（33a）について発話時に起こった「意志」として「自分の部屋へ行こう」と発話され、（33b）でも「これからは量を少なめにして健康的な食事をしよう」という未来に事象に対する「意志」が表されていると一條は述べているが、これらはいずれも現在の事象や未来の事象に対する「話し手による現在時での予測判断」を表していると考えられる。

５．まとめ

「話し手による現在時での予測判断」という発話時点における話し手の心的態度が現在の事象に適用される場合、WILL BE V-ing 構文は「現在における進行中の状況に関する推量」用法であり、未来の事象に適用される場合、「未来における進行中の状況」用法となる。現在の事象にせよ、未来の事象にせよ、話し手にとって未確認であるという点では同様である。

また、WILL BE V-ing 構文における「ことの成り行きの未来」用法では、助動詞willが後続する進行形とともに頻繁に使用されることにより、命題内容化されていることも指摘した。

一條は「意志を表すWILL BE V-ing 構文」の存在を主張するが、それらはいずれも「予測判断」と解釈される。つまり、「意志」はWILL BE V-ing 構文固有の意味特性と言うよりは文脈に依存して与えられていると考えるべきである。

注

１（１）において副詞句が前置された場合、前者の解釈のみが可能であることが指摘されている。

（i）At five p.m. I will be flying to London.
（Declerck 1991:167）

２ 澤田は（１）が still を含む場合、前者の解釈のみが可能であることを指摘している。

（i）I will *still* be flying to London at 5 p.m.
（澤田 2014:362）

また、副詞が疑問の焦点となっている場合は「ことの成り行きの未来」としか解釈できないことが指摘されている。

（ii）A:When will you be flying to London?
B:At 5 p.m. （Ibid.）

３ モダリティの定義に関しては日本語と英語とで違いがあるが、ここでは中右（1994:45-46）を援用したい。

（i）モダリティの理論的枠組み

１．体系的定義
モダリティは命題内容の対極にある意味範疇で、モダリティと命題内容は文の意味の二極構造を形成する。階層意味論モデルによれば、最上位の二層構造において体系的に定義される。展開規則で示せば、次のとおりである。

a. M（S）^{2} → D-MODALITY⌒M（S）^{1}
b. M（S）^{1} → S-MODALITY⌒PROP^{4}

２．概念的定義
モダリティとは発話時点における話し手の心的態度のことをいう。ここで心的態度とは人間精神の知情意の全領域にわたるあらゆる心理作用を指していう。また発話時点とは瞬間的現在時の意味に解釈されるものとする。

３．典型性理論
モダリティの構成要素概念の間には重要度の差がある。すなわち、心的態度＞話し手＞発話時点、の順に優先順位が下がる。このうち、心的態度の要素概念だけは必須条件である。言語表現のモダリティらしさは、この優先順位に基づいて算定される。モダリティ表現は、それが生ずる文法構造の性質によって、必要とされるモダリティらしさの度合いが決まる。

参考文献

Close, R. A. 1975. *A Reference Grammar for Students of English.* London:Longman.
Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Tokyo:Kaitakusha.
林高宣. 2017.「英語の条件文とモダリティについて」『島根大学教育学部紀要』第51巻, 59-67.
一條祐哉. 2022.「意志を表すwill be V-ing」『英語語法文法研究』第29号, 51-66.
柏野健次. 2012.『英語語法詳解』東京:三省堂.
Leech, G. N. 2004[3]. *Meaning and the English Verb.* London:Longman.
Murphy, R. 2000[2]. *Grammar in Use Intermediate.* Cambridge:Cambridge University Press.
中右実. 1994.『認知意味論の原理』東京:大修館書店.
Palmer, F. R. 1987[2]. *The English Verb.* London: Longman.
澤田治美. 2006.『モダリティ』東京:開拓社
澤田治美. 2014.『現代意味解釈講義』東京:開拓社.